リチャード三世像の変遷
—文学と歴史の狭間で—
【I】

石　原　孝　哉

I

はじめに

イングランド歴代諸王の中で、リチャード三世(Richard III)ほどその悪名があまねくとどろいている国王はいない。残忍冷酷な王位簒奪者、権謀術数の権化、醜悪不遜な殺人鬼、権力欲の化身、奸智奸才に長けた野心家。このような稀代の悪王としてのイメージが、シェイクスピアの『ヘンリー六世』(*King Henry the Sixth*)および『リチャード三世』(*King Richard the Third*)によって、増幅し、定着したことは誰も否定しないであろう。

文学の世界での解釈は別にして、近年、主として歴史研究家の間から、リチャード善人説を唱える多くの著作が発表されている。稀代の悪王という評価は、テューダー朝の歴史観であり、歴史上のリチャード三世は文武に優れた有能な国王だったというのである。

文学が、実在の歴史上の人物を扱い、しかもその登場人物が事実とは関係なく、圧倒的な説得力をもって社会一般に受け入れられているような場合に、文学と歴史はどのような相関関係を示すのであろうか。リチャード三世という典型的な人物を例に、文学と歴史の狭間で揺れる歴史劇上の人物像の変遷を探ってみたい。

リチャード三世の物語の特徴を最も端的に表しているのは、1597年に出版されたシェイクスピアのFirst Quarto のTitle Pageに記された以下の言葉であろう。

> The Tragedy Of King Richard the third. Containing, His treacherous Plots agaist his brother Clarence: the pittieful murther of his innocent nephewes: his tyrannical vsurpation: with the whole course of his detested life, and most deserued death. As it hath beene lately Acted by the Right honourable the Lord Chamberlaine his seruants. (1)

ここには兄クラレンス(Duke of Clarence, George Plantagenet)に対する裏切り、甥の二人の王子殺害、王位簒奪、おぞましき生涯と、当然の死など劇の全体的な特徴が要領よくまとめられている。シェイクスピアの描いたリチャード三世は、シェイクスピア史劇という虚構の世界の傑出した登場人物であると同時に、当時の人々にとって最も身近な実在の人物でもあった。しかし、天才的な劇作家によって豊かに肉付けされたリチャードは、文学の殻を突き破って、人々の心の中に明確な人物像として定着してしまった。

舞台の上で圧倒的な魅力をもって観客を魅了する主人公はもちろんシェイクスピアの創作だが、このリチャードを構成している要素、つまり、リチャードにまつわるエピソードや事件は決してシェイクスピア一人の想像によるものではなく、いわゆる、テューダー神話の中で、伝承され、発展しつつ、エリザベス朝まで継承されてきたものである。『リチャード三世』に限らず歴史劇は当時の伝承の大枠の中で劇化されたもので、その枠を逸脱したり、つまり史実を逸脱したり、当局の意向と食い違うと厳しく訂正を命じられた。劇は作者の想像力の産物で、歴史的な事実とは違うという認識は、テューダー朝からステュアート朝のイギリスにおいては驚くほど希薄で、特に歴史劇においては文学と歴史の垣根はほとんどなかったといっても過言ではない。したがって、シェイ

クスピアの描いたリチャード三世は、単に文学作品中の人物であるばかりでなく、当時の伝承の集大成であり、さらに歴史上の人物に対する一つの解釈でもあった。というわけで、この伝承の軌跡を逆にたどってゆけば、リチャード三世像形成の過程が見えてくるはずである。

II

リチャードを扱った主な資料とその特徴

リチャード三世に対する評価が、近年、多様化した理由は、今世紀になって、今までなかなか手に入らなかった貴重な資料が、一般に公開されるようになったからである。この時代の歴史的な資料が次々に刊行された陰に「リチャード三世協会」('Richard III Society') の貢献を忘れるわけにはいかない。1924年に設立されたこの協会は、もともとリチャード三世の理解者の集まりであったが、その後、バラ戦争時代の貴重な資料の刊行や、研究会、講演会の開催、機関誌を発行してこの時代に関する論文に発表の場を提供するなど、幅広い研究分野で活動するようになった。おかげで、今まで外国では入手不能であった貴重図書が、たやすく手にはいるようになった。また、これと競うように各国の多くの学者の手で一次資料の整理も着々とすすめられてきたが、なかでもキース・ドックレイ(Keith Dockray) が最近刊行した『リチャード三世資料』(*Richard III, A Source Book*) [(2)] は、今まで幻の資料とされた多くの資料を、再録、整理し、この時代を研究するひとびとに多大な便宜を与えている。この小論も、基本的な情報はこれらの資料によるものである。最初に、本論で引用する主な資料について簡単に整理しておく。

(1) シェイクスピア、および同時代の主な資料

①『ヘンリー六世、第二部』(*The Second Part of King Henry The Sixth*) (1590-1)、『ヘンリー六世第三部』(*The Third Part of King Henry The Sixth*) (1590-1)、『リチャード三世』(*King Richard The Third*) (1592-3)。

シェイクスピアの作品は芝居の脚本であり、年代記などの歴史書とは異なる。しかしながら当時の観客の歴史認識と、後世のリチャード三世評価に決定的な影響を与えたという点で、ここを出発点として考えてゆくのが妥当であろう。

シェイクスピアにはリチャードを扱った作品が3作ある。もちろん中心作品は『リチャード三世』であるが、それ以前に書かれた『ヘンリー六世第二部』および『ヘンリー六世第三部』にも、リチャードはヨーク派の重要人物として登場する。『ヘンリー六世』三部作は、シェイクスピアが弱冠26歳の頃、初めて劇作を試みた、いわば習作期の歴史劇で、文学的には決して秀作とはいえない。しかし、これに続いた『リチャード三世』は、シェイクスピアの出世作で、初演以来、後期の悲劇に優るとも劣らぬ人気を博した。これはシェイクスピアが、歴史劇を単なる歴史的な事件のクロノロジカルな記述に留めるのではなく、作中人物を自由に行動させる悲劇仕立ての劇の確立に成功したためである。主人公リチャードは中世以来の型にはまった悪役ではなく、背中に瘤を背負い、足を引きずって歩く醜悪な姿態の持ち主であると同時に、心も性格も、その肉体同様に醜く歪んだ強烈な個性の持ち主として描かれている。演劇的には、『オセロー』(*The Tragedy of Othello, the Moore of Venice*)のイアーゴや『リア王』(*The Tragedy of King Lear*)のエドモンドを凌ぐ悪人ぶりが、いわば魔性の魅力ともいえる不思議な力を持って、見る人を圧倒する。 このために当時から、この作品は歴史劇というよりは悲劇とみなされ、既に引用したFirst Folioの扉にもTragedyと大書してある。

このような悪魔的な魅惑の持ち主に仕立て上げたのは、劇作家シェイクスピアの手腕であるが、その原型となるリチャード像は、シェイクスピアの同時代の多くの作品において既に確立されていた。そのうちのいくつかを見てみよう。これらはいずれも、シェイクスピアが劇の執筆の際に原本として使用したか、あるいは十分読む機会があったとされる書物で、シェイクスピアの原典研究の中で名前を挙げられているものである。

②『イングランド、スコットランド、アイルランド年代記』*The Chronicles of England, Scotland and Ireland* (1577)

これはラファエル・ホリンシェッド(Raphael Holinshed)が編纂した当時最も人気のあった歴史書のひとつで、俗に『ホリンシェッドの年代記』として知られている。シェイクスピアも『ヘンリー六世』シリーズをはじめとする一連の歴史劇、および、『マクベス』(*The Tragedy of Macbeth*), 『リア王』、『シンベリン』(*The Tragedy of Cymbeline*)等の原本にも使ったとされる。この本は、ロンドンの書籍商、レジナルド・ウルフ(Reginald Wolfe)が計画した『世界史』の一部をなすはずであったが、彼が1573年に死亡してこの計画は挫折した。そしてこれを継承したホリンシェッド担当のイングランド、スコットランド、アイルランド編だけが第1巻として、1577年に刊行された。この本は人気を集め、1587年に、増補、改定されて第2版が刊行され、英国史を一般庶民の間に普及させるのに大いに貢献した。シェイクスピアが、多くの作品の素材として利用したのはこの第2版であった。

イングランドの部分の執筆はウイリアム・ハリソン(William Harrison)が担当したが、バラ戦争時代の記述は、ほとんど他の伝記作者の受け売りであることが明らかにされている。この点については後でふれたいと思う。

③その他のシェイクスピア時代の資料

シェイクスピアと同時代の資料で、折にふれて言及する資料の中から二つだけ簡単に紹介しておく。

『為政者の鏡』(*A Mirror for Magistrate*)(1559-1574)。これは16世紀後半に幅広く読まれ、シェイクスピアも多くの史劇の参考にしたとされる韻文の物語集である。ジョン・リドゲイト(John Lydgate)の『王侯の没落』(*Falle of Princes*)(1431-38)を下敷きにして、ウイリアム・ボールドウィン(William Baldwin)が1559年に編纂、集大成したものである。ここには、英国史上の悲劇的な人物の伝記が描かれているが、リチャード三世はじめクラレンス公ジョージ等『リチャード三世』の主要人物が登場する。ボールドウィンの仕事はジョン・ヒギンズ (John Higginns)に引き継がれ、彼は1574年に、『為政者の鏡、第一部』(*The First Part of Mirror for Magistrates*)を出した。このころは、歴史書の人気が頂点に達した時期で、無数の類書が出回った。人気に便乗したと思われ

るおびただしい模倣書は、はからずも当時の歴史ブームの過熱ぶりを示している。シェイクスピアが実際どこまでこの本を参考にしたかについては議論が分かれるが、たとえば、ヘンリー六世の殺害をリチャードの仕業にしたところ[3]、あるいは、クラレンス公ジョージの殺害をリチャードのせいにしたところはこの本によるとされている[4]。

『概説イングランド年代記』(*A Summarie of Englyshe Chronicles*)(1565)と『イングランド年代記』(*Annales [The Chronicle of England]*) (1580)は、いずれもジョン・ストウ(John Stow)によって書かれた歴史書である。彼は、『ロンドン概説』(*A Survey of London*)の作者として、あるいは、ジェフリー・チョーサーの作品集の編纂者としてもあまりにも有名であるが、1565年に『概説イングランド年代記』を、さらに、1580年には『イングランド年代記』を出版して、歴史書の分野でも得意の観察眼、文才を遺憾なく発揮した。ストウもリチャード三世について記述しているが、そのリチャード観は、基本的にはトマス・モアやホールを継承するものである。しかし、塔の中の王子たちの殺害についてはリチャードが殺させたという証拠がないこと、リチャードの容姿については、古老の話として、背は低かったがせむしではなく、容貌も美男子であったことなど、他の本にはない記述が見られる。

(2) エドワード・ホールの『名門ランカスター家とヨーク家の統一』*The Union of the Two Noble Families of Lancastre and York* (1548)

しかし、これらのエリザベス朝の歴史書におけるリチャード三世像の源をたどっていくと、そのほとんどがヘンリー八世の時代にエドワード・ホール(Edward Halle)が著した『名門ランカスター家とヨーク家の統一』を継承したものであることが明らかになった。とりわけホリンシェッドの年代記は、ほとんどがホールの年代記に依拠している[5]ことがわかった。ホールの年代記は当時最も人気のあった歴史書で、わかりやすい文章と大衆性から、ひろく読まれていた。ホールはテューダー朝の法律家で、当初、ヘンリー八世時代の興味深い事件や自らの見聞録、風俗描写などを興味本位に書き綴っていたが、ポリ

ドール・ヴァージル(Polydore Vergil)の年代記の人気に刺激されて、本格的な歴史書の執筆を思い立ったといわれている。ホールの年代記は、その大枠をヴァージルの年代記に倣い、「歴史とは政治を映す鏡であり、後の為政者たちへの警告である」というルネッサンスの歴史観の典型的なモデルとして、大衆の間で大人気を博した。ホールはまた、ヘンリー八世のもとで要職を歴任したプロテスタントで、ヘンリー八世の熱狂的支持者としても有名であった。

ホールの歴史認識は、彼の年代記の序文にはっきりと示されている。彼は、まず、バラ戦争期のイングランドをランカスター家とヨーク家という名門の対立によって引き起こされた分裂の時代と捉える。これはランカスター家のヘンリーとヨーク家のエリザベスの結婚によって統合されるが、彼は、両家の結婚によって混乱がすべて収まったわけではない、と考える。

> But the olde deuided controuersie...was suspended and appalled in the persone of their moste noble, puissant and myghty heyre, kyng henry the eight, and by hym clerely buried and perpetually extinct... (6)

ここに見られるように、ホールの年代記の特徴は、バラ戦争の混乱を最終的に収拾したのは、ランカスター、ヨークの二つの尊い血を受け継いだ理想的な君主、ヘンリー八世である、という点にある。

ホールの年代記は、国王の治世ごとに区分された読みやすいものであった。ホールは各章ごとにわかりやすい中見出しを付け、その時代の特徴が一目でわかるようにした。たとえば、「動乱の時代」(ヘンリー四世)、「勝利の行動」(ヘンリー五世)、「騒然たる季節」(ヘンリー六世」、「繁栄の御代」(エドワード四世)、「哀れな生涯」(エドワード五世)、「悲劇の行動」(リチャード三世)、「賢明なる統治」(ヘンリー七世)、「ヘンリー八世の勝利の御代」といった具合である。ホールが最も力を入れたのは、最後の「ヘンリー八世の勝利の御代」の部分で、量的にも全体の二分の一を占めている。先にも述べたように、ホールが最も関心をもっていたのは「現代」、すなわち神の恩寵を一手に享受した

ヘンリー八世の時代だったからである。ここには、困難なバラ戦争の負の遺産を一掃し、平和と繁栄をもたらしたヘンリー八世を神の代理人として称える彼の歴史観が如実に表れている。

ホールは、1530年頃、年代記の執筆にかかったが、この大作の完成を見ずに1547年に死亡した。年代記はリチャード・グラフトン(Richard Grafton)によって、1年後の1548年に刊行され、ホールの遺志は生かされた。しかし、この過程でひとつ厄介な問題が持ち込まれた。この中にトマス・モア(Thomas More)作とされるリチャード三世の伝記が挿入されたからである。このいきさつについては多少の説明を要する。

グラフトンは裕福な商人で、当初は英語版の聖書 (7) の出版などに資金援助をしていたが、次第に自らも出版事業に乗り出すようになった。彼は、ホールの年代記を出す前の1543年にジョン・ハーディング(John Hardying)の年代記を出版したが、この折にも、その補足として「きわめて信頼すべき作者」によるリチャード三世の伝記を刊行している。

時は流れて、ヘンリー八世のあとを継いだエドワード六世(Edward VI) が在位六年あまりで夭折し、世はメアリー・テューダー(Mary Tudar)の時代になった。すると、今まで影をひそめていたカトリック教徒が一斉に勢力を盛り返した。当然ながら、カトリックの殉教者であるトマス・モアの名誉も回復した。1557年、モアの甥のウイリアム・ラステル(William Rastell)は、それまで大切に保管していた原稿をまとめて、モアの英語著作集を出した。この本の冒頭にはラステル自身による次の言葉が記されている。

> The history of king Richard the thirde (vnfinished) writen by Master Thomas More than one of the vndersheriffis of London: about the yeare of our Lorde . 1513. VVhich worke hath bene before this tyme printed, in hardynges Cronicle, and in Hallys Cronicle: but very muche corrupte in many places, sometyme hauyng lesse, and sometime hauing more, and altered in wordes and whole sentences: muche varying fro the copie of his

own hand, by which thys is printed. (8)

ここから、ハーディングとホールの年代記に組み込まれたリチャード三世の伝記が、実は、モアの書いたものであることがはっきりした。多くの名著の発行を手がけ、出版の権威者を自認するラステルは、世間でもてはやされている叔父トマス・モアの原稿が著しくずさんであることに憤慨し、自らの手で決定版を出したのである。

グラフトンは、きわめて早い時期に、何らかの方法でモアの本を手に入れたものと思われる。しかし、この時はまだヘンリー八世の在世中であったために、国事犯トマス・モアの名前を公表する事はできなかった。そこで、「きわめて信頼すべき作者」というもったいぶった言い方で、ハーディングの年代記にこれを付け加えたのであった。グラフトンの抜け目ない商人根性のおかげで、この本は人気を博し、彼に一定の収入をもたらした。

暴君ヘンリー八世は、放蕩無頼のつけがたまって1547年に死亡したが、その翌年、グラフトンは、未完のままになっていたホールの年代記を出版することになった。ハーデイングの時に成功した経験から、グラフトンはここにもモアの『リチャード三世伝』(*History of King Richard the Third*)を入れたものと思われる。今度は、晴れて著者名を明らかにしたうえでの出版であったが、これをラステルに咎められたのは既に述べたとおりである。グラフトンは全面的にラステルの主張を認め、これ以降のホールの年代記には、ラステル版によって改定された『リチャード三世伝』が掲載された。このような運命のいたずらとも思える偶然によって、グラフトンの年代記には、ホールによるリチャード三世の記述と、トマス・モアの『リチャード三世伝』が奇妙な形で同居することになった。「国王御用達印刷業者」(king's printer)の肩書をもつグラフトンの手で、この本は大人気となりエリザベス朝のリチャード観形成に大きな影響を与えた。後にグラフトンは自らも筆を執って年代記の執筆にあたり、『要約イングランド年代記』(*An Abridgement of the Chronicles of England*)(1562), 『イングランド年代記入門』(*A Manuel of the Chronicles of Englande*)(1565), 『完全詳細

版年代記、イングランドおよび国王の歴史』(*A Chronichle at Large and Meere History of the Affayres of England and Kinges of the Same*)(1568)を刊行した。これらは概ねホールを土台にしたものだが、中には彼独自の見解も含まれている。

これまで見てきたように、エリザベス朝に無数に出回っていた歴史書は、多かれ少なかれグラフトンの年代記を通じてホールとモアの影響を受けている。さらに、ホールはヘンリー八世の時代のことは自分の直接経験で書いたものの、それ以前のことはポリドール・ヴァージルはじめそれ以前の歴史書によったことが知られている。というわけで、リチャード像の原型を知るためには、トマス・モアの『リチャード三世伝』とポリドール・ヴァージルの『英国史』(*Anglica Historia*)を詳細に検討する必要がある。

(3) トマス・モアの『リチャード三世伝』*History of King Richard the Third* (1413-8)

トマス・モアの『リチャード三世伝』は、エドワード四世の死からリチャードが王位に就くまでのごく短い期間を扱ったもので、他の年代記のようにイングランドの通史ではない。また、これにはラテン語版と英語版があり、モアが文章の練習用に書いたものであるともいわれた。しかし、ラテン語版には明らかに国外の読者のために、イングランドの事情や事件の背景を説明したような部分があるために、むしろイギリス人の読者と外国人の読者を想定して書いたと考えるほうが自然であると思われる。両方とも未完のままに放置されたが、すでに述べたような紆余曲折を経て、英語版がいち早く出版され、続いてラテン語版も、1565年にルーヴァンの印刷業者の手によって出版された。

執筆年代は、1513年から18年までの間と推定される[(9)]が，この時期のモアは、議員、ハムプシャーの治安判事、リンカン法学院講師を務めるかたわら、フランダース、カレー等に使節として出張するなど多忙を極めていた。この時期は『ユートピア』の執筆時期とも重なり、時間的な余裕がなかったこと、および登場人物と何らかの関わりがある人々がモアの周辺にいたことなどが、こ

の作品が未完のままに放置された理由かもしれない[10]。

モアの『リチャード三世伝』は、ヴァージルやホールなどの年代記に較べて、リチャード三世の性格、行動、および王位簒奪のあった1483以降の一連の事件について、はるかに詳しく書かれていること、および、作者がリチャード三世に対して明確な敵意を隠さないこと等の特徴をもっている。モアがこのような伝記を書くためには、当時の宮廷生活や、政治の裏側まで知り尽くした情報提供者が不可欠であった。モアの身近にいて、 プランタジネット家が崩壊して、テューダー王朝がこれに代わる過程をつぶさに見てきた人物といえば、カンタベリー大司教で、後に大法官、枢機卿となるジョン・モートン(John Morton)しかいない。彼は、一時期『リチャード三世伝』のラテン語版の著者で、モアは単にその翻訳者に過ぎないと考えられていた。今日ではこの説の信憑性は薄いが、作者のリチャードに対する異常な憎悪を説明するには、リチャードと直接敵対したモートンを作者とするのがわかりやすかったのである。

モアは1490年頃、つまり、13才になるかならないかの頃、ランベスにあるモートンの屋敷に書生として住み込み、起居をともにしながらモートンの訓育を受けた。『ユートピア』(*Utopia*)ではラファエル・ヒュトロダェウスの口を借りて、モートンのことを、「話し方は洗練され、効果的でした。法律問題に関する豊かな知識、無比の知性と豊かで優れた記憶力、こういう天性を彼は研学と実地の応用でさらに向上させた人」で、「権威ある地位もさることながら、それによってよりも賢慮と徳によって尊敬さるべき方でした」[11] と評している。この文章からも察せられるように、モアはモートンに心酔しており、人格形成期のモアはモートンから多大な影響を受けた。モートンも早くからもモアの非凡な才能に着目し、モアを自分の息のかかったオックスフォード大学のカンタベリー・コレッジへ入学させている。

ジョン・モートンは薔薇戦争時代はイーリーの司教であった。シェイクスピアでは、ヘイスティングズの失脚という劇的な場面に登場する。ロンドン塔での参議会で、当時摂政だったグロスター公リチャードに、自宅の庭の苺を所望されたモートンは、これが恐ろしい陰謀の舞台とはつゆ知らずに席を外す。こ

の間に、リチャードは態度を一変させて、自分の腕が萎えたのは、王妃と、共謀したショア夫人の魔法のせいだ、と言いがかりをつけ、その保護者のヘイスティング卿を断罪する。バッキンガムの下に監禁されたモートンは（ここはシェイクスピアには描かれていない)、後に四幕三場でリッチモンドの陣営に走ったことが報告されている。

この会議の部分は、モアの『リチャード三世伝』でもほぼ同じように描かれているが、モアは、最後の場面で再びモートンを登場させている。それによれば、モートンはロンドン塔の会議以来、バッキンガム公の居城ブレクノック城に監禁されていたが、次第にバッキンガムと親しくなっていった。そしてバッキンガムの口からときどきリチャード三世に対する不満の声が漏れるのを聞き、うまく操れば二人を不和にさせるのは容易だと感じるようになる。そして、バッキンガムが近づいてくる機会をとらえては、巧みに彼をそそのかしたのである。

The bishop was a man of gret natural wit, very wel lerned, & honorable in behaueor, lacking no wise waies to win fauor. He had bene fast vpon the part of king Henry while that part was in wealth, & natheles left it not nor forsoke it in wo, but fled ye realme with the quene & the prince, while king Edward had ye king in prison, neuer came home but to ye field. After which lost, & yt parte vtterly subdued, the tother for his faste faith & wisedome, not only was contente to receiue him, but also woed him to come & had him from thence forth bothe in secret trust & very speciall fauor. Whiche he nothing deceiued. For he being as ye haue heard after king Edwardes death, first taken by ye tirant for his trouth to ye king, found ye meane to set this duke in his top, ioined gentlemen together in aid of king Henry, deuising first ye maryage betwene him & king Edwardes doughter, by whiche his faith declared & good seruice to bothe his masters at once, wt infinite benefite to the realm, by ye coniunccion of those

twoo bloodes in one, whose seural titles had long enquieted ye land, (12)

このように、モートンは「知恵」、「機知」、「学問」、「賢明さ」、「誠実さ」を兼ね備えている理想の賢人として描かれている。渡辺淑子氏も指摘しているとおり (13)、モアが断定を避けるときにいつも使う「賢明な人々はこう考えている」、とか「信頼すべき情報によって」といった叙述は作品の一つの手法であるから、これをそのままモートン個人に結びつけるわけにはいかないが、バッキンガム公に遠まわしに謀反をすすめるモートンを、知恵、賢明、誠実の徳を備える人物として登場させ、一方で「賢明な人々」をしばしば引き合いに出すモアの手法から判断して、モアが「賢明なる人」というときモートンを念頭に置いていたことはほぼ間違いはない。

モアの著作が、当時の政界の内面の詳細な点にまで及び、事件にまつわる細かいエピソードまで漏らさずに描いていること、およびリチャードに対するあからさまな敵意などから判断して、モートンがモアの『リチャード三世伝』の主たる情報提供者であることは疑いない。

(4) ポリドール・ヴァージルの『英国史』*Anglica Historia*(1513)

モアの作品がリチャード三世の個人的な伝記の色彩が強いのに対して、もっと客観的な歴史書としての体裁を整えた年代記を書いたのがポリドール・ヴァージルであった。ヴァージルは1502年に、カステリ枢機卿(Adoriano Castelli)の代理人として教会税を徴収するためにイギリスを訪れた帰化イタリア人である。彼はこの当時すでに人文主義者として国際的に名前を知られ著名人で、歴史書を書くのに十分な学識と、古典的な歴史的素養の持ち主だった。彼はヘンリー七世の正式な要請によって英国史の執筆を始めた。彼はイギリスに留まってこの仕事を続けたが、彼の『英国史』は1509年の、ヘンリー七世の崩御までには完成しなかった。1513年になってやっと書き終わったが、出版はさらに遅れて1534年のことであった。この本は後継者のヘンリー八世に献呈された。ヘンリー八世はヴァージルに好意的ではあったが、この献呈により、彼に特別

な庇護を与えることはなかった。こうした事情からもわかるように、ヴァージルの年代記はテューダー王朝の正式な公文書というわけではない。彼は事実を書くことを第一義とし、当時入手できたいくつかの年代記を検証したうえに、ヨーク家の統治時代を良く知っている古老達からも直接話を聞き、できる限り史実と虚構とを峻別しようと努めた。このような事実はヴァージルの歴史家としての誠実さを示すものである。

しかし、だからといって彼が独立不偏の、全く公正な歴史家というわけでは決してない。彼自身は、常に事実を書くと述べてはいるが、この歴史書の全体的な基盤がテューダー家の勃興を正当化する「テューダー史観」に基づいていたことを忘れてはならない。ヴァージルはそれ以前の年代記作者と違って、英国史をそれぞれの国王ごとに分割して扱った。この形は、さらに簡潔な形でホールに受け継がれ、テユーダー王朝後期の読者を魅了したことは既に述べたとおりである。ヴァージルの縦糸となる概念は王位の正当な継承であり、そこでは不変の人間性と気まぐれな運命とが終わりなきゲームを繰り広げる。だが、特に15世紀においては、国王達は神による懲罰に翻弄された。

そしてこれこそ、『リチャード二世』(*The Life and Death of King Richard the Second*)から『リチャード三世』にいたるシェイクスピアの一五世紀歴史劇の全体的枠組みとなっている。すなわち、災いの連鎖を始動させたのはリチャード二世(Richard II)に対する忠誠という神聖なる誓いを破ったヘンリー四世(Henry IV)であった。彼の罪はその後三代にわたって子孫に降りかかり、ヘンリー六世(Henry VI)が生まれながらにして不幸なのはこのためである。しかし、神に代わって懲罰を与える側も罪を免れえない。エドワード四世も同じように国王に対する忠誠の誓いを破ったために、自分の息子を殺されるという形でその報いを受ける。この連鎖の次に来るリチャード三世はさらに極悪で、彼もまた当然の報いを受ける。ヘンリー・テューダー(Henry Tudar)のボズワースの戦いにおける勝利、およびヨークのエリザベス(Elizabeth of York)との結婚、およびヴァージルが自らの目で確かめた、王位のヘンリー八世への継承は、このおぞましい連鎖に終止符を打った。この歴史観を最も雄弁に物語っているの

は、シェイクスピアの『リチャード三世』の終幕におけるリッチモンド伯ヘンリーの「ここに白バラと赤ばらの統合をはかりたいと思う。長い間両者のいがみ合いに眉をひそめていた天も、このめでたい和合にほほえんでくださろう」(14) という言葉である。

ここには、ランカスター家とヨーク家の王位継承争いによる薔薇戦争の混乱を終結させたリッチモンドすなわちヘンリー七世は神の代理人であり、白バラと赤バラの統合によって、やっと回復した平和を守ることこそ神意であるというテューダー史観がよく表れている。実際、長年にわたる内戦の混乱によって、貴族達はすっかり疲弊して、巷には厭戦気分が満ちていた。こういった状況のなかでは、「白バラと赤バラの統合による平和の回復」という大義を「テューダー王朝のプロパガンダ」として、否定することなどできるはずがなかった。この時期に、赤バラの中央に白バラをあしらったテューダー・ローズが、統合と平和の象徴として全国津々浦々まで行き渡り、王家の正式のバッジとしてばかりでなく、「イン・サイン」ないしパブの看板として庶民に親しまれたことをみても、この考えが国民的な合意となっていたことがわかる。

中世の秩序の根本には「神によって聖油を塗られた国王の身分が正当に継承される」という大前提があった。そして薔薇戦争時代のイングランドは、この大前提が崩れたために混乱に陥った。争いを起こした王達は神による懲罰を受けねばならないが、とりわけ、神の意志による平和への道に立ちはだかるものは地獄に落ちねばならない。神の代理人たるヘンリー七世に真っ向から戦いを挑んだリチャード三世はこの大義に対する最大の敵である。

ヴァージルはこのようなテューダー史観に立って英国史を書いたが、事実を書くことを宣言したヴァージルは、歴史的な事実を歪曲することはなかった。しかし、リチャード三世の心理的、精神的な面を自由に表現できるところでは、この稀代の悪王に対する嫌悪感を抑えることはできなかった。つまり、表面的には正しく、善意に満ちたリチャード三世の振る舞いの陰に、いつも欺瞞、不正直といった性格を描き出すことを忘れなかったのである。このような手法は、ときに、あからさまに悪人だの悪魔だのと書くよりもはるかに説得力があるも

のである[15]。

ポリドール・ヴァージルの『英国史』におけるリチャード三世は、今日のリチャード擁護派の歴史家の目から見れば、いわれのない敵意にさらされていることになるが、これをもってヴァージルを責めるのは酷であろう。というのは、この時代にはあらゆる階層の人々がテューダー王朝のもとで久方ぶりの平和と繁栄を享受して、少なくとも表面的には、テューダー史観になんの疑念ももたなかったからである。また、たとえテューダー家に不満のある人でも、死を覚悟して、年代記作者に社会的な常識を逸脱するような情報を与えたり、証言をするはずがないからである。

このようにその時代独自の事情はあるものの、ヴァージルの『英国史』はテューダー史観を代表する、信頼できる歴史書である。

(5)『続クローランド年代記』*Crowland Chronicle continuation* (1486)

これまで紹介してきた資料は、いずれもテューダー史観の確立した後の比較的後世の資料で、著者は間接的な試料や証言をもとにリチャードについて記述している。次にそれより一時代古いテューダー王朝初期の資料を紹介する。その中で省くことができないのが、『続クローランド年代記』である。この本も、リチャードへの敵対心を隠さないが、いくつかの貴重な証言を含んでいる。

作者はこの本を、リンカン・シャーのクローランドにあるベネディクト派の修道院を訪れた際に、「十日間で書き上げ、最後は1486年の4月最後の日」に完成したことがわかっている。作者は匿名であるが、作者の問題はこの年代記を扱う研究者にとって避けては通れない問題なので、簡単に触れておこう。

内容から判断して作者は、学識があり、事情に通じた、ある程度の年輩の聖職者で、政界、行政、外交に関する知識が豊富である。大法院について特に関心が高く、教会法の博士で、エドワード四世の枢密院顧問官であり、1471年にバーガンディに使節として派遣されたことがわかる。このような状況証拠からして、この条件に最も近いのはリンカンの司教ジョン・ラッセル(John Russel)である。彼は、教会法の博士で、エドワード四世の外交使節を務めた顧問官で、

1470年代後半にはエドワード四世の国璽尚書を務め、1483年から5年まではリチャード三世の大法官を務めた。しかも、1486年の4月にはクローランドにいたことが知られている。

しかし、ラッセルにはそぐわない事実も少なくない。たとえば、リチャード三世の大法官にしては、エドワード四世時代に比べてリチャード三世の時代の情報が、質においても量においても劣っている。最大の問題点はその文体で、この本は他のラッセルの作品と比較して修辞法が全く別人のものとされている。

こうした事情を勘案して、次に浮かんでくるのはラッセルの側近たちである。一人はレスターの助祭長リチャード・ラヴェンダー(Richard Lavender)、もう一人は主席書記官ヘンリー・シャープ (Henry Sharp)である。このうちで可能性が高いのがヘンリー・シャープで、彼は教会法ではなく民法の博士であるが、高位の枢密院顧問官として、ラッセルとも親しく、エドワード四世のもとで政治、行政、外交に通じていた。彼はリチャード三世の時代には次第に疎んじられたが、これによって、リチャード三世に対する敵愾心、および、リチャード三世時代の情報の少なさなどは説明がつく。さらに彼が1486年の4月に引退していることも有力な手がかりである。この問題は、『続クローランド年代記』を扱う誰もが避けては通れない問題として、多くの学者が懸命に探求し、ある程度の輪郭は見えてきてはいるものの、依然として決め手となる決定的な証拠はいまだにあがっていない。

『続クローランド年代記』の作者は、いかなる恣意的な「虚偽も、憎悪も、贔屓」もないと明言しているにもかかわらず、作者がリチャードを欺瞞と二枚舌の持ち主として敵意の対象としていることは明らかである。たとえば、王位簒奪とは関係ない1483年以前のリチャードの行動についても否定的で、一般的にはリチャードの偉大な功績として認められている1482年のスコットランド遠征についてもまったく評価していない。ウッドヴィル一族の政治への影響を有害としているものの、ヘイスティングズ卿の処刑を正当なものと認めず、リチャードとその所領である北部の領民との密接な関係を、望ましからざらぬ

ものと一蹴している。さらに、国王就任を不正なものとして絶対に承認しない。妻アンの病気と死についても辛辣極まりない批判をしている。また、リチャードは、北部の領主時代に実行した過度の税金取り立てと専制政治をそのまま南部に押しつけた、とも非難している。しかし、最も特徴的なのはボズワースの戦いにおける記述であろう。そこには、リチャードが戦いの前夜に多くの悪魔が現れる恐ろしい夢を見たことが記されている。

これら一連の、あからさまな反リチャードの記述は、作者個人の偏見というよりは、1486年の4月という早い段階にもかかわらず、テューダー王朝が自分の政敵、リチャード三世を歴史の表舞台から抹殺する作業に取りかかったことを示すものと解釈すべきであろう。「ついに神は栄光の勝利をリッチモンド伯に与えたのだ。リッチモンドは、今やただ一人の国王として、以前リチャードがかむっていた高価な王冠を身につけている、、、」といった記述や、「それまで人々に計り知れない苦悩を与えてきた邪悪から国民を解放するために、神が天国から使わした天使のごとく」(16) といった記述を見れば、リチャードを悪とし、これを糺すために、神の代理人としてリッチモンド伯ヘンリーが遣わされたのだという「テューダー・プロパガンダ」はいっそう明白である。

(6)『ラウスの書』*Rous Roll* (1491)

『ラウスの書』はウオーリック・シャーの好古家ジョン・ラウス(John Rous)によって書かれた歴史書である。彼は1491年に、『イングランド国王の歴史』(*History of the Kings of England*) という本を書いたが、この本はリチャードに対するいわれなき中傷ともいえるほどの偏見に満ちた本である。一方彼には、リチャード三世の在世中に書いた『ウオーリック伯爵の歴史』(*History of the Earls of Warwick*)という本があり、ここではリチャードを理想の君主として称えている。リチャード三世に対する評価が、在世中と死後で、全く逆転しているという事実こそ、リチャード三世像の形成の鍵となるものであろう。

ジョン・ラウスはキング・メイカーとあだ名されたウオーリック伯リチャード・ネヴィル(Earl of Warwick, Richard Neville)の妻、アン(Anne)（同名の娘と

区別するために以下ウオーリック伯未亡人という）の礼拝堂付き牧師であった。しかし、キング・メイカー没後の、相続争いの中で生じたウオーリック伯未亡人と娘婿のクラレンス公ジョージとグロスター公リチャードとの軋轢、とりわけリチャードとの相克から、ラウスはリチャードに激しい憎悪を抱くにいたったといわれている。

ウオーリック伯家の相続争いは、後でもたびたび言及するのでここで簡単に説明しておこう。キング・メイカー、リチャード・ネヴィルの広大な所領は、半分は未亡人が両親から相続したのものであった。一方の半分である、ネヴィル家の財産は、キング・メイカーの死後甥の六歳になったばかりのジョージ・ネヴィル(George Neville)に渡ることになっていた。そして、未亡人の財産に対して、娘でクラレンス公ジョージの妻となっているイザベル(Izabel)と、妹のアン(Anne)が相続権を持っていた。相続争いの中で、幼いジョージ・ネヴィルの相続権が剥奪されると、国王エドワード四世は、次弟のクラレンスの勢力が強大になりすぎることを恐れ、この所領をリチャードに与えた。さらに、リチャードが兄のクラレンスの保護下にあったアンを密かに連れ出し、彼女との結婚を願いでたときに、王はこれを許可した。そして、議会はウオーリック伯未亡人の所領を、彼女が生きているにもかかわらず、死亡したときと同じように扱い、二人の娘に相続させてしまったのである。こうして、さきにリチャードがネヴィル家代々の財産を手に入れたのに加えて、妻アンが未亡人の財産の半分を手に入れた。ここに事実上、広大なキング・メイカーの所領の四分の三がリチャードのものとなり、強大な権力基盤が形成された。このように、エドワード四世が次弟のクラレンスよりもリチャードを優遇したのは、一度はキング・メイカーと組んで王に対抗したことのあるクラレンスよりも、終始自らに忠実であったリチャードの方を、王が信頼していたためである。しかしこれは、長女イザベルと結婚してウオーリック伯領を独占するつもりであったクラレンスを失望させ、海外におけるランカスター派の残党と彼を急速に接近させていった。（これから六年後の1478年、国王自らこの件を議会に告発し、議会が権利剥奪決議を可決して、クラレンスは処刑される）

一方財産を奪われたウオーリック伯未亡人は娘婿のリチャードに伴われて、修道院に入り、世間から身を隠してひっそりと暮らした。ジョン・ラウスの推定によれば、未亡人はリチャードに監禁されていたという。結局、隠遁生活をしていた未亡人はその後の激しい政争に巻き込まれることなく、二人の娘と娘婿より長生きするという皮肉な結果となった。テューダー王朝成立後、ヘンリー七世は彼女に年金を与えて厚く保護したために、未亡人は幸福な晩年を送ることができた。ジョン・ラウスは、このためにリチャードを憎み、ヘンリー七世に感謝したといわれている。

既に述べたように、ラウスには1483年から1485年の間に書かれた『ウオーリック伯爵の歴史』というもう一冊の歴史書がある。これには、モアの『リチャード三世伝』と同じく、ラテン語版と英語版がある。注目すべきはその英語版に、リチャード三世を理想的な君主として褒めちぎった文章があることである。しかし、ラテン語版ではこの部分は書き直され、リチャードを賞讃した部分は、ヘンリー六世の皇太子で、アン・ネヴィルの最初の夫のエドワードにすり替えられている。このことは、既に述べた理由によるラウスのリチャードに対する憎しみ説と矛盾する。というのも、ウオーリック伯未亡人がリチャードに伴われてBeaulieuの庇護所に隠遁したのは1473年のことであり、『ウオーリック伯爵の歴史』を書いたと推定される1483－5年には、リチャードを憎む理由は十分揃っていたからである。

この問題に対する最も妥当な説明は、『ウオーリック伯爵の歴史』はリチャードの在世中に書かれたために、ラウスはリチャードを誉め上げたものの、世がヘンリー七世のテューダー時代になると、リチャードの評価は逆転してしまった。そこでラウスは書き直しを試み、ラテン語版はうまくエドワードとすり替えたものの、英語版までは手が回らず（あるいは既に自分の手許になかったので)、この部分だけ残ってしまったと考えられる。当時、「悪魔のリチャード」と、リチャードの罪を処罰するために神によって遣わされた「天使のヘンリー」というイメージを国民に浸透させる「テューダー・プロパガンダ」が推進されつつあったことから、ラウスの変節もこうした事情の反映であるというわけで

ある。

とすればラウスは聖職者にあるまじき変節漢に見えるが、これは封建時代の王権の実態を知らない現代人の感覚で、このような変わり身の早さは封建領主の下では珍しいことではなかったようである。ロス(Charles Ross)はその著書の中で、ピエトロ・カルメリアーノ(Pietro Carmeliano)の例を挙げている。彼はリチャード三世からヘンリ七世の時代まで、宮廷で仕えたヒューマニストであるが、リチャード在世中は彼を褒めちぎり、死後は悪し様に罵って、恬として恥じることはなかった。

(7) ドミニク・マンチーニの『リチャード三世の王位簒奪』*The Usurpation of Richard The Third* (1483)

ドミニク・マンチーニ(Dominic Mancini)の『リチャード三世の王位簒奪』はリチャード三世が在位中に書かれた数少ない本として注目される。マンチーニはイタリア人のヒューモニストで、たまたま王位簒奪劇のあった1483年当時ロンドンに滞在し、イングランドで起きつつあった政治劇を、自分のパトロンであったウイーンの大司教に書き送っていた。

この文書の存在は長いこと知られていなかったが、今世紀になって偶然発見された。というのはこの記録はイギリスではなく、フランスのリールの市立図書館にあったためである。発見したのはアームストロング(C.A.J.Armstrong)で、彼はこの文書を1934年に発見し、ラテン語から英語に翻訳して、1936年にオックスフォードから出版した。

マンチーニはウイーンの大司教アンゲロ・カトー(Angelo Cato)の要請で、外交使節団の一員として、おそらく1482年の夏ないし秋に、イギリスを訪れたと思われる。そして1483年4月のエドワード四世の死以降の、まさに動乱の時期をこの国で過ごした。しかし、リチャード三世の戴冠式の直後の1483年7月6日にイギリスを発って、フランスに行かねばならなかった。というわけで、マンチーニがこの記録を書き上げたのはフランスに渡った後の、1483年の12月1日、オルレアン地方のBeaugencyという町においてであった。以後数百年

間、この文書は世に知られることなく、バラ戦争時代のイギリスに関心を示す人など稀なフランスの地でひっそりと眠っていた。

この書物が出版された当時、マンチーニがヨーク家ともランカスター家とも全く利害関係のない外国人であること、彼がエドワード四世の崩御からリチャード三世の戴冠式までの期間ずっとイングランドにいたこと、彼が高い学識の持ち主であったことなどから、『リチャード三世の王位簒奪』は完全に中立的な歴史の証人として、第一級の歴史的資料とされた。しかしながら今日では、この本の資料としての価値にはいくつかの点で疑問がもたれている。

第一に、彼自身が事実関係についてあまり自信をもっていないことである。カトーへの手紙でこのことを率直に認めて「私はここで述べられている人々の名前や、時間的間隔、および、この問題全体について人々にどんな秘密の意図があったのかといったことについては十分には確認しておりません」(17) と述べている。実際、彼はリチャードの領地の所在を無視したり、エドワード四世の死の日付を二日ほど間違えたり、王弟のヨーク公リチャード(Duke of York)の庇護所からの連れだしをヘイスティングズ卿(William Hastings)の処刑より早い時期にしたりといった基本的な間違いを犯している。また、彼はロンドンから出た形跡がなく、地方での事件や場所については曖昧な記述が多いうえに、ロンドンの事件さえ直接目撃した形跡がない。これは、彼が全く英語が話せず、事件の核心からはほど遠いロンドンのイタリア人社会に身を置いたことと関係している。さらに、彼の唯一の実名をあげての信頼できる情報源、ジョン・アージェンティン博士(Dr John Argentine)は、エドワード五世(Edward V)に最後まで仕えた医師であったことがわかった。リチャードが王位に就いたときにエドワード四世に最後まで忠誠を誓っていた人々が粛正されたことは、ジョン・モートンの例に見られるように、明らかである。まったくの第三者のはずのマンチーニがリチャード三世に対して終始一貫して敵対的であるのはアージェンティンを情報源としているためであるというのが、親リチャード説をとる学者の見方である。さらに、アージェンティンはトマス・モアやポリドール・ヴァージルにも良く知られており、彼らの有力な情報源であったといわれてい

る[18]。彼の資料が今日ではあまり重要視されないのは、彼の基本的な態度が、「自分の保護者であるカトーを楽しませるためにできる限り劇的な物語を書くこと」であったためである[19]。

以上のような問題点はあるにせよ、マンチーニの『リチャード三世の王位簒奪』は、リチャードの在世中に書かれた数少ない資料の一つであり、当時の状況を知る有力な手がかりであることに変わりはない。

III

資料に見るリチャード像の変遷

リチャードの物語は、シェイクスピアの三つの作品に見られるように、かなり複雑な小話から構成されている。しかし、ここではその骨格となる以下の10項目だけに絞って、既に解説した資料でいかに扱われているかを比較検討してみる。

(1) リチャードの容姿と性格。(2) 兄クラレンスに対する裏切り。(3) ヘンリー六世殺害。(4) アンとの結婚とその死。(5) 1483年の王位簒奪。(6) ヘイスティングズの処刑。(7) バッキンガムの反乱。(8) 庇護所からの王子たちの連れだしとロンドン塔での殺害。(9) ボズワースの戦い。(10) 北部の領主としてのリチャード。

(1) グロースター公リチャードの容姿と性格

最初にシェイクスピアの三つの作品において、リチャードの性格と容姿がいかに描かれているか見てみよう。

シェイクスピアの三つの劇の舞台は薔薇戦争時代のイングランド。国王製造人とあだ名されるウオーリック伯、リチャード・ネヴィルに翻弄され、王位はランカスター家とヨーク家を行きつ戻りつした後に、ヨーク家のエドワード四世の手によって天下は統一される。『リチャード三世』はここから始まる。戦場ではあれほど勇敢であった兄エドワード四世は、ショア夫人をはじめとして

多くの女性を侍らせ、連日酒色におぼれている。王を見習って、武将たちも快楽の池に身を投じている。歴戦をくぐり抜けてきた傷だらけの甲冑は勝利の記念に壁に掛けられ、その主たちはみな脂粉の匂いの立ちこめた部屋に入り浸って、酒と女にうつつを抜かしている。

しかし、この宴に一人だけ入れない男がいる。醜悪な肉体の持ち主グロスター公リチャードである。

> I, that am curtail'd of this fair proportion, / Cheated of feature by dissembling nature, / Deform'd, unfinish'd, sent before my time / Into this breathing world, scarce half made up, (*Richard III* I.i.18-21)

女性に見向きもされないリチャードには、平和はむしろ疎ましい。戦場であれば強い者だけが生き残る。だが、軍鼓の響きに代わって宴の嬌声が世に満ちると、剛勇無双の勇者よりも、巧言令色や美辞麗句の輩が幅を利かす。それならばいっそ悪党となって世間を見返すというのである。

> I am determined to prove a vilain / And hate the idle pleasures of these days. (*Richard III*. I.i.30-31)

ここに見られるように、シェイクスピアが描くリチャードは、生まれながらの不具者として描かれている。背中に大きな瘤を背負って、「不格好にびっこを引き引きそばを通るのを見かければ、犬も吠えかかる」[20] ほどの醜男である。そんな彼が世間を見返すには、手段を選ばず王になることしかない。

なお、リチャードの容姿については『ヘンリー六世・第三部』にもっとあからさまな描写が見られる。

> She did corrupt frail Nature with some bribe, / To shrink mine arm up like a withered shrub; / To make an envious mountain on my back, /

Where sits deformity to mock my body; / To shape my legs of an unequal size; / To disproportion me in every part, / Like a chaos,

(*Henry VI, pt. III,* III.ii.155-61)

『リチャード三世』の冒頭だけを見ると、エドワード四世がヘンリー六世を倒してつかの間の平和がもどった時点で、リチャードが悪人になる決心をしたように見えるが、『ヘンリー六世・第三部』を見ると、彼が悪の道に進むのは、生まれたときから既に運命づけられていたことがわかる。母親の話によれば、彼は足から先に生まれたが、それは「急いで出てきて、わが一家の正当な権利を簒奪しているやつらを滅ぼす」ためであった。また、生まれたときに既に歯が生えていたが、それは「このおれが犬のようにうなり、噛みつくようになるしるし」であった[21]。ここには、健全な精神は健全な肉体に宿るという近代的な概念を裏返しにした、「背中に不気味なこぶを背負った容貌魁偉な男は、その外見どおりの悪党で、性格もその曲がった背骨のようにいじけて歪んでいる」という中世的な通念がみられる。

さらに、次のヘンリー六世の最後のせりふは、リチャードの誕生のときに既にさまざまな不吉のしるしがあったというエリザベス朝当時の伝説を示している。

The owl shrieked at thy birth—an evil sign; / The night-crow cried, aboding luckless time; / Dogs howled, and hideous tempest shook down trees; / The raven rooked her on the chimney's top, / and chattering pies in dismal discords sung. (*Henry VI. pt.3.* V.vi.44-8)

ここに描かれているリチャードは、その誕生の時からこの世に苦難をもたらすように運命づけられた不幸の象徴であり、神の恩寵から見放された不具者、秩序への反逆者である。

次にシェイクスピアが多くの歴史劇の下敷きにしたホリンシェッドの年代記

から、リチャードの性格について述べた部分を見てみたい。ホリンシェッドでは、エドワード四世とその弟のクラレンス公ジョージの性格を讃えた後、三男のリチャードについて次のように述べている。

> Richard, the third sonne, of whome we now intreat, was in wit and courage equall with either of them, in bodie and prowesse farre vnder them both; litle of stature, ill featured of limmes, crooke backed, his left shoulder much higher than his right, hard fauoured of visage, and such as is in states called warlie, in other men otherwise; (22)

ここでは知力、気力では兄たちに負けないが、背は低く、手足が萎え、背は曲がり(crook backed)、左肩が右より高く、顔かたちが醜いことが描かれている。ここにはシェイクスピアの描くリチャードの肉体的な特徴のすべてが記されており、リチャード像がシェイクスピア個人の創造によるものではなく、同時代に既に巷間に伝わっていたことがわかる。

次に、エドワード・ホールの『二つの名門ランカスター家とヨーク家の統一』を見てみよう。

> As he was small and litle of stature, so was he of body greately deformed, the one shoulder higher then the other, his face smal, but his cotenaunce was cruel, and such, that a man at the first aspect would iudge it to sauor and smel of malice, fraude and deceite;..... beside that, the dagger that he ware he would when he studied with hys hande plucke up and doune in the sheth to the myddes, neuer drawyng it fully out, hys wyt was pregnaunt, quicke and ready, wyly to fayne and apte to dissimule, he had a proud mynd and an arrogant stomacke.... (23)

ここでは、不具で片方の肩が高いとは書いてあるが、背が曲がりという表現

はない。表情からは、悪意、嘘、欺瞞という性格がわかり、下唇を噛むのは凶暴性を示すこと、さらに、勉強しながらいつも腰の短剣を鞘の途中まで抜いたり、刺したりする癖があったことなどが詳しく述べられた後、リチャードが、機知に富み、当意即妙、喜びを表すときにも十分に気を配り、本心を隠す傾向があった。精神は誇り高く、腹は傲慢であったことが、記されている。ここでは、シェイクスピアに見られるような「姿も心も醜い」リチャードとはひと味違うリチャード像が描かれている。

次に、トマス・モアの『リチャード三世伝』を見てみよう。

冒頭はエドワード四世の晩年と主な登場人物についての説明で始まっている。そこではエドワード四世を、「立派な方で、見るからに君主らしく」、優しくて慈悲深く、戦いの時は勇猛果敢な、文武両道に優れた君主であるとし、これとは対照的に、リチャード三世を残忍非道な悪王として紹介している。

> Richarde the third sonne, of whom we nowe entreate, was in witte and courage eguall with either of them, in bodye and prowesse farre vnder them bothe, little of stature, ill fetured of limmes, croke backed, his left shoulder much higher then his right, hard fauoured of visage, and suche as is in states called warlye, in other menne otherwise. (24)

ここには後世の定説となった、「背が低く、手足が不自由で、背が曲がり、左肩がひどく上がり、人相が悪い」といった外形的な特徴の全てが記されているが、既にお気づきのように、この部分は先に引用したホリンシェッドの文章と、綴り字を除けば、全く同じである。既に述べたように、ホリンシェッドはホールの年代記に全面的に依拠し、ホールの年代記には、トーマス・モアの『リチャード三世伝』が挿入されていた。結局、シェイクスピアは、ホリンシェッドを読んだにせよ、ホールを読んだにせよ、事実上モアの『リチャード三世伝』を読んでいたことになる。

さらにリチャードの性格については、モアは次のように述べている。

He was malicious, wrathful, enuious, and from afore his birth, euer frowarde. It is for trouth reported, that the Duches his mother had so muche a doe in her trauaile, that shee coulde not bee deliuered of hym vncutte: and that hee came into the worlde with the feete forwarde...and (as the fame runneth) also not vntothed... (25)

「意地悪、怒りっぽい、嫉妬深い、つむじ曲がり」といった性格の他に、モアは「帝王切開で、足から生まれ、噂によれば歯も生えていた」といった、誕生にまつわる様子も詳しく描写されている。

一方、リチャードの特質とされる武勇について、「貴族の中では勇武の人といわれるものの、その他の人では言い分が違った」(26)と断定を避けつつも、有能な武将であったことを認めている。

None euill captaine was hee in the warre, as to whiche his disposicion was more metely then for peace. Sundrye victories hadde hee, and sommetime ouerthrowes, but neuer in defaulte as for his owne parsone, either of hardinesse or polytike order. (27)

戦では勝つことも負けることもあったが、彼の性格は戦いに向いていると、その武勇を否定しないものの、これに続く文では、リチャードは「贈り物をして友情を得るも、略奪、強奪で恨みをかった」、「無口で陰険で、腹黒い偽善者」、「心の中で憎んでいても外見は優しく、殺そうとする相手にキスすることもためらわなかった」と性格の悪さが羅列されている。(重複するので引用しないが、モアのリチャードの性格に関する記述は、ホリンシェッドに丸写しされていることはいうまでもない)。

次に、ポリドール・ヴァージルの『英国史』を見てみよう。

He was little of stature, deformed of body, the one shoulder being higher than the other, a short and sour countenance, which seemed to savour of mischief, and utter evidently craft and deceit. (28)

この記述は、モアに似ているが、背が曲がりという表現はなく、肩も左肩と特定していない。

さらにヴァージルは、リチャードの数少ない美点については次のように記している。

Truly, he had a sharp wit, provident and subtle, apt both to counterfeit and dissemble; his courage also high and fierce, which failed him not in the very death, which, when his men forsook him, he rather yielded to take with the sword than by foul flight to prolong his life... (29)

ヴァージルの、「彼の勇気は凛々、激しかったが、そのためにかえって命を落とした。部下が彼を見捨てたときに、命を惜しんでみじめに背走するよりは、剣をとって戦う道を選んだ」というくだりは、シェイクスピアに大きなヒントを与えたかもしれない。ボズワースの戦いのさなか、リチャードは人間業とも思えぬめざましい働きをみせて敵と渡り合うが、馬が倒されると、徒立ちでリッチモンドを探し求める。一旦退却を勧めるケイツビーを一喝して次のようにいう。「下郎、すでに賽は投げられたのだ、その目にいのちをかけたおれだ、どうでようと退くものか」、そして彼は「馬をくれ、馬を！馬のかわりにわが王国をくれてやる」(30) と叫びながら群がる敵の中に切り込むのである。

これより古いラウスの『イングランド国王の歴史』を見てみよう。

He was small of statue, with a short face and unequal shoulders, the

right higher and the left lower... (31)

背が低く、顔の短いことは後世の歴史家と同じであるが、右肩が上がっている点はモアとは全く逆である。

Richard was born at Fotheringhay in Northamptonshire, retained within his mother's womb for two years and emerging with teeth and hair to his shoulders... (32)

当時のラウスが、いかにヘンリー七世の影響下にあったにせよ、またどのような状況があったにせよ、「母の胎内に2年いて、歯が生え、肩まで毛が生えた状態で生まれた、、、」といった記述は、かえって歴史的資料としての信頼性を著しく損なうものであろう。むしろ注目すべきは、これほどの偏見に満ちたラウスが、リチャードの姿態について、背が曲がっているとか、奇形という表現を一切使っていないことである。これに続く文章では、「彼の星座は天蠍宮で、蠍のように前は柔和で後ろに鋭い針をもっていた」と述べている。(実際はリチャードの誕生は10月2日で、天秤宮なのだが、それよりも、この「前は柔和で後ろに鋭い針をもっていた」の部分が、後世色々なリチャード伝説を生み出すことに注目したい。

さらに、「このリチャード王は、全盛時代には残酷なことこの上なく、治世は三年余におよび、まるでキリストの敵アンティクライストのように治めた」といった記述は、(3年余は明らかに2年余の間違い) この世が終末で、リチャードはアンティクライスト、そしてヘンリー七世は再臨した救世主のように聞こえる。

この異様ともいえるラウスの激しい憎悪を見れば、数年前彼が書いた、『ウオーリック伯爵の歴史』のリチャード讃歌は信じられないほどである。そこでは、フォザリンゲイ城で生まれたことだけは共通だが、後は前書とは違ってリチャードを讃える言葉が並んでいる。

Rex Richardus tercius—born in the Castle of Foderyngay a myghti prince in his dayes speciall gode lord to the town & lordshyp of Warrewyk wher yn the castel he did gret cost off byldyng In the which his most noble lady & wyf was born and at gret instance of her he of his bounteus grace with owt fee or fyn graunt to the seyd borowh frely by chartur as kyng William Conquerour his noble progenitor a fore tym gret previlagis. (33)

またさらに別の項には、悪に厳しく、領民には優しい理想的な領主としてのリチャードが描かれている。

The moost myghty prynce Rychard by the grace of god kynge of ynglond and of fraunce and lord of Irelond by verrey matrimony with owt dyscontynewans or any defylynge yn the lawe by eyre male lineally dyscendyng from kynge harre the second all avarice set a syde Rewled hys subiettys In hys Realme ful commendabylly poneschynge offenders of hys lawes specyally Extorcioners and oppressors of hys comyns and chereschynge tho that were vertues by the whyche dyscrete guydynge he gat gret thank of god and love of all hys subiettys Ryche and pore and gret lavd of the people of all othyr landys a bowt hym. (34)

ここからは、法律を破る者、なかんずく職権によって財物を強要したり庶民を抑圧する者を厳しく処断する一方、徳ある者を慈しむ立派な領主、そんなリチャード像が鮮明に浮かび上がってくる。これがリチャード三世の治世中に書かれ、先に引用した部分がヘンリー七世の治世中に書かれた点を考慮しても、同一人物に対するこの極端な評価の違いにはあきれるばかりである。しかし、これは既に述べたように封建時代の国王の権力がいかなるものかを想像できない現代人の感想で、このような権力に対するへつらいは、中世にあってはむし

ろ当然であった。

比較のために、いくつかのリチャード在世中の文書を紹介する。最初は1484年、9月12日にアーチヴォルト・ホワイトロー（Archibald Whitelaw）がリチャードに当てたものである。

> Most serene Prince and King: of all the soverigns whom I have known, you stand out as the greatest—in the renown of your nobility, in your sway over your people, in your strength of arms, and in the wealth of resources at your command... (35)

さらに、彼の美徳を称える言葉が連綿と続いた後、リチャードの外見に触れて、「自然は、かつてこれほどの精神、これほどの強靭さを、あえてこの小さな身体に閉じこめたことはなかった」、「最大の勇気が彼の小さな身体を支配している」と述べていることから、彼が小柄な人物であることがわかる。しかし、当然といえば当然ながら、手足の異常や背が曲がっていることを想像させる部分はない。むしろリチャードの武人としての卓抜さを示す文が続いている。

> For you are the embodyment of military skill, prowess, good fortune and authority—all qualities which Cicero, in his eulugy of Pompey, declares should be sought in the best military leader... (36)

これらの文章は、彼が軍人として優れていたことを示すものである。後世の伝承のように、極端な奇形であれば、戦場で敵と互角に渡り合うことなど到底できなかったであろう。

次に、1484年当時ロンドンを訪れていたイタリア人のヒューマニスト、ピエトロ・カルメリアノの評を見てみよう。

> If we look (for) religeous devotion, what prince is there in our time who

shows a more genuine piety? If for justice, who can we reckon above him througout the world? If we look for prudence in fostering peace and waging war, who shall we judge his equal? If we look for truth of soul, for wisdom, for loftiness of mind united with modesty, who stands before our King Richard? What Christian Empire or Prince can be compared with him in good works and munificence? To whom are theft, rebelliopn, pollution, adultery, manslaughter, usury, heresy and other abominable crimes more hateful than to him? obviously, no one. (37)

これほどあからさまな賛辞をあびせたにもかかわらず、カルメリアノは二年後にヘンリー七世に仕え、評価を一変させてリチャードをヘンリ六世およびロンドン塔の王子たちの悪逆な殺害者として激しく糾弾している。

次は1483年、リチャードが王位について間もない頃に、セント・デイヴィッドの司教トマス・ラングトン(Thomas Langton) がカンタベリーの友人に宛てた手紙である。

He contents the people wherever he goes better than ever did any prince...I never liked the qualities of any prince as well as his; God sent him to us for the welfare of us all. (38)

「神はわれわれすべての幸福のために彼（リチャード）を使わしたのだ」云々は、後年人々がヘンリー七世やヘンリー八世を、「国民を救済するために神が使わした天使」と讃えたのとまったく同じ讃辞である。

このように、リチャードの性格についての評価は、在世中とテューダー王朝になってからでは、全く逆転している。中世の封建領主の下にあっては、国王に対する批判はそのまま反逆罪として、たちまち絞首四つ裂きの刑に処せられたことを思い起こせば、むしろこれは当然なのかもしれない。勝者は自らの正

当性を証明するためにあらゆる手段を講じることができるのに対して、敗者はその手段をもたない。

次に各資料に見られる、リチャードの容姿について簡単に整理しておこう。リチャード在世中の資料には、たとえばホワイトローなどに見られるように、彼が背が低かったことを示す資料はあるものの、背が曲がっているとの記述はない。プランタジネット朝の家系には、たしかに背が高く、身体頑健な男子が多い。たとえば、エドワード一世、二世、リチャード二世、それに彼の兄エドワード四世などは皆体型に恵まれていた。リチャードが背が低かったのは、彼が母の産んだ11番目の子であるからだとロスは推測している。ヴァージルは、彼の父親ヨーク公リチャードの外見に触れて、非常に背が低く、小さく丸顔であったと述べている。また、リチャードの戴冠に際してジョン・ショー(John Shaw)が、兄のエドワード四世は背が高く大柄で父親に似ていなかったが、リチャードは父の面影を良く残していたことを挙げて人々にリチャードの正当性を訴えたことを思い出して欲しい。こう考えてみるとリチャードは、ロスの推定のように身体上の不具合ではなく、背が低く、丸顔であった父親の素質をそのまま受け継いだものであると考える方が自然であろう。

リチャードの体型については、ニコラス・フォン・ポペラウ(Nicolas von Poppelau)という旅行者も記録を残している。彼はセヴィリアの名家の生まれで、イギリスを1484年に訪れ、日記を残している。それによれば、彼は1484年5月1日にPontefractに到着し、翌日リチャード三世に拝謁している。そのときのリチャードの外見について彼は、「リチャードは彼自身より、指三本分背が高かったが、がっちりとしてはおらず、少しやせ型であった。手も足もきゃしゃであったが、心は大きかった。」と記している。リチャードの手足が本当にきゃしゃであったのなら、その「萎えた腕」の伝説がどのようにして生まれたの説明になるであろう。しかし背が高く、やせ形の男という彼の説明が正しければ、背が曲がっているという後世の伝説とは矛盾する[39]。もっともポペラウ自身の身長がわからない限り、リチャードの身長も推量しようがないのであるが、、、。

このように初期の記録には、リチャードが背が曲がっているとの記録はまったくない。最初に背が曲がっているという記録が表れるのは、テューダー王朝が成立して六年後の1491年のヨーク市の記録である。ヨークのジョン・ペイントゥアー(John Payntour)という酔っぱらいの教師が、「リチャードは偽善者で、背が曲がり、犬のように溝に葬られた」(40) と述べたことがわかっている。

容姿の問題では、文献よりも一枚の絵の方が雄弁な場合もある。リチャードの肖像画のなかでもウインザー城に所蔵されているものは、死後30年ぐらいのうちに書かれたと推定される古いものであるが、ここには肩が盛り上がった姿が描かれていて、これがリチャードの奇形を示す有力な決め手とされた。しかし、最近になってエックス線照射によって詳細に調べたところ、この部分は後世になって書き加えられたものであることがわかった。

結局リチャードの外形については、彼の在世中の記録からは、彼が丸顔、ないし短い顔の持ち主で、二人の兄よりかなり背が低かったことぐらいしか明らかになっていない。これがテューダー時代なると、1491年にラウスが、「母の胎内に2年いて、歯が生え、肩まで毛が生えた状態で生まれた」、「彼の星座は天蠍宮で、蠍のように前は柔和で後ろに鋭い針をもっていた」と記録し、同じ年にヨークのジョン・ペイントゥアーが、「偽善者で、背が曲がっている」と記録している。1513年のポリドール・ヴァージルの記録には、「背が低く、身体は不具、片方の肩が高い」とあり、ほぼ同じ頃のトマス・モアにいたって、リチャードは兄たちより「身の丈低く、手足の形悪く、背が曲がり、左肩が右肩よりずっと高く、顔つきは醜かった」「帝王切開で足から先に生まれ、噂によれば歯も生えていた」と、シェイクスピアとほぼ同じ姿に描かれていることがわかる。

ここに見るようにリチャードの容姿と性格については、ラウスなどテューダー朝初期の伝記作者の偏見が次第に増幅され、国民の間に圧倒的な影響力を持っていたトマス・モアの筆によって、揺るぎないものとなっていったことがわかる。(以下次号に続く)

Notes

(1) Shakespeare, William, *King Richard the Third*, First Quart, title page, 1597.

(2) Dockray, Keith, *Richard III, A Source Book*, Sutton Publishing, 1997.

(3) Campbell, Oscar James, ed., *The reader's Encyclopedia of Shakespeare*, Thomas Y. Crowell Company, 1966. p.553.

(4) Wilson, John Dover, ed., *Richard III*, Cambridge U.P., 1954. pp. xxiii-viii.

(5) Ross, Charles, *Richard III*, University of California Press, 1981. p.xxv.

(6) Halle, Edward, *The Union of the Two Noble Families of Lancastre and York*, 1550, (reprinted Scolar Press, 1970) An introduction of kyng Henry the fourth. fol. i.

(7) *Matthew Bible* (1537)はGraftonの資金援助の賜であり、彼自らの出版による聖書としては、1539年の増訂英訳聖書、俗にいうGreat Bibleが後にイングランドの教会の標準聖書となり、長く国民に愛された。

(8) Sylvester, Richard S. ed., *The Yale Edition of the Complete Works of St. Thoms More, Volume 2 The History of King Richard III*, Yale University Press, 1963, p.2.

(9) Rastelは執筆年代を1513年と明言しているが、本文中に1514年以降に関する歴史的な言及もあることから、Sylvesterは前掲書のlxiii-lxvで1514年から18年の間と推定している。

(10) cf. Sylvester, op. cit., pp.lxviii-lxy, 『トマス・モアとその時代』、研究社、1978, p.136.

(11) モア・トマス、『ユートピア』、沢田昭夫訳、中公文庫、1978, p.66.

(12) Sylvester, op. cit., pp.90-1.

(13) 沢田昭夫、田村秀夫、P・ミルワード編 『トマス・モアとその時代』、研究社、1978, p.148.

(14) Shakespeare, William, *Richard III*, V.v.19-21.

(15) Ross, op. cit., p.xxv.

(16) Pronay, Nichlas, and Cox, John, *The Crowland Chronicles Continuations:* 1459-1486, Richard III and Yorkist History Trust, 1986, pp. 181-3.

(17) Mancini, Dominic, *The Usurpation of Richard III*, ed. by C.A.Armstrong, Alan Satton,1969, p.57.

(18) Pollard, A. J., *Richard III and The Princes in the Tower*, Alan Sutton, 1991, p.7.

(19) Dockray, op. cit., p.xvii.

(20) Shakespeare, op. cit., *Richard III*, I,i.23.

(21) Shakespeare, William, *Henry VI*, pt.3. IV.vi.70-1, 77.

(22) Allardyce Nicoll, Josephine Nicoll ed., *Holinshed's Chronicle As Used in Shakespeare's Plays*, Everyman's Library, 1927, p.175.

(23) Halle, op. cit., fol. xxxv.

(24) Sylvester, op. cit., p.7.

(25) ibid, p. 7.

(26) ibid, p. 7.

(27) ibid, p. 7-9.

(28) Vergil, Polydore, *The Anglica Historia*, cited from Dockay, op. cit., p.12.

(29) ibid, p.12.

(30) Shakespeare, op. cit., *Richard III*, v, iv, 9-13.

(31) Rous, John, *History of the Kings of England*, cited from Dockray, op. cit., p,11.

(32) ibid, p.11.

(33) Rous, John, *The Rous Roll, (Earls of Warick)*, ed. by Charles Ross, Alan Sutton, 1980, cap. 17.

(34) ibid, cap. 63.

(35) Dockray, op. cit., p.8.

(36) ibid, p. 8.

(37) ibid, p.8.

(38) ibid, p. xiv.

(39) Mancini, op. cit., pp. 136-8.

(40) Ross, op. cit., p.140.